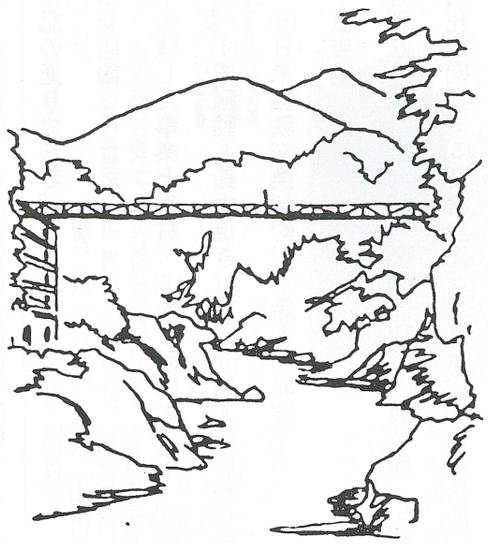
改組当初で五〇万円であったが、大正九年に一〇〇倍増資を行い、五〇〇〇万円となる。大正六年には貿易年商十五億四〇〇〇万円（うち、三国間貿易三億四〇〇〇万円）に達し、三井物産の年商十億九五〇〇万円を凌ぎ、日本一の商社となる。同年、金子直吉は、三井・三菱と大正財界の覇権を争う「天下三分の宣言書」を発する。

第三期、「貿易部門」分離にともなう、「株式鈴木」（資本金八〇〇〇万円、うち払込み五〇〇〇万円）と、「鈴木合名」（資本金五〇〇〇万円）の、いわゆる二重組識時代―鈴木系企業集団（当該会期の総数、株式会社七十八社、直営事業所六社）、鈴木合名を頂点とする持株支配の四重構造（分身会社→「過半数支配」会社→「少数支配」会社→「関係密接非支配」会社）を形成。大正十五年、財界不況時の貿易年商でも五億二〇〇〇万円（うち三国間貿易三億二〇〇〇万円）を達成。

これを従業員数からみれば、(1)明治二十七～三十一年頃で、十九～二十三人程度。(2)明治末年頃で、八〇人を突破。(3)最盛時では、鈴木系企業集団六十五社（資本金五億六〇〇〇万円）で二万五〇〇〇人と称せられた。



本講演に関するより詳細については、左記の拙著を参照されたい。

- 桂芳男『幻の総合商社　鈴木商店―創造的経営者の栄久と挫折』（社会思想社、平成元年）。
- 桂芳男『関西系総合商社の原像＝鈴木・日商岩井・伊藤忠商事・丸紅の経営史』（啓文社、昭和六十二年）。

土佐の歴史と文化を訪ねて ④

金子直吉

――広谷喜十郎――

直吉が育てた企業や人物

わが国の工業化に不滅の光

金子直吉は、吾川郡吾川村出身。高知市ででっち奉公をした後、明治十九年に神戸に行き鈴木商店に雇われたが、明治二十七年に主人が無くなり未亡人よねの厚い信頼を受けて鈴木商店の経営にあたり、めざましい活躍を始めるのであった。

その後、工業部門へも多角的な進出を行い、第一次世界大戦の国際市場において大々的な商業取引を行った。

最近、桂芳郎著『総合商社の源流鈴木商店』、沢野恵之著『史上最大の仕事師』という本が刊行されているが、一時的には、三菱や三井に追いつかんばかりの勢いを示す状態であったという。桂氏の研究によると、大正財閥の花形として登場した鈴木系企業集団の最盛期は六十五社、大正六年に貿易年商十五億四千万円となり、三井物産を抜いてトップの座を占めるまでになる。それもつかの間、大戦後の経済不況を乗り越えることができず、やがて鈴木商店は倒産に追い込まれている。

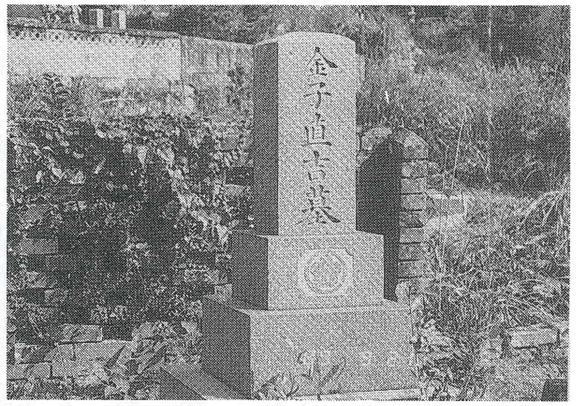
だが、直吉が育てた企業と人物は、その後のわが国の工業化の発展に大きな役割を果たしている。例えば「企業」では、日商岩井、帝人、神戸製鋼所、石川島播磨重工業、三井東圧化学、昭和石油、三菱レーヨン、日産化学、大日本製糖、サッポロビールなど、「人物」は北村徳太郎（大蔵大臣）、大屋晋三（商工大臣）、久村清太（帝人会長）ら、あまりにも多くて全部挙げることができない。桂氏は「わが国の工業化に不滅の光を放っている」と述べているほどである。それに、日本発条の坂本寿氏ら多くの土佐人も育てている。

元国際汽船取締役の住田正一氏は「金子さんは英語を全然知らなかった人である。けれども砂糖であれ、麦であれ、銀塊で

あれ、世界商品相場には最も明るい人であった」と述べている。大屋晋三氏は「金子さんは太陽のごとき存在だな。（略）若い者を教育訓練する大教育者であったということだ。（略）鈴木商店におった連中で大臣になった者が五、六人もいる」と言っておられる。

直吉の少年時代は貧乏で正規の学校へ行けなかったが、母親は直吉に「お前たちは立身出世して金持ちになっても決して貧乏人をいじめてはならぬぞよ」と言いきかせていた。農人町で質屋に奉公していた時に、質屋の軍記物や翻訳物の本を手当たり次第に読み、ついに孫子の丘法書まで熟読することになった。質屋が学校であり、しかも商売しながら生きた学問を身につけたのである。

（太陽鉱工須藤監査役提供）



筆山（高知市）にある金子直吉の墓

―長老　井上函二さんを偲ぶ―

田中卓次

会報「たつみ」第五十号に記載の長寿番付による東横綱筆頭の井上函二さんは、平成元年二月二十二日午前六時、伊勢市外小俣町の老人ホーム「白ゆり荘」で死去された。

明治二十四年一月十二日生、旧歴で九十九才、百才の寸前で、誠に残念である。

神綱電機社友会より、白寿のお祝を差上げて間もなくであった。

氏は大正五年京都帝国大学電気工学科を卒業。小田嶋修三氏創業の鈴木商店鳥羽造船所内に設立された鳥羽電機製作所に入社、始業時の設計を担当し、其の基礎を確立されたのである。

昭和十六年三月新設の神戸製鋼所山田工場（現神鋼電機伊勢工場）の初代工場長に就任し、戦時中は海軍の監理工場として、航空機用電装品の製作に専任されていた。

終戦後は停年退職されて後、一時日本エヤーブレーキ会社の監査役に就任されていた。

私は大正十五年鳥羽電機製作所に入社以来井上さんには先輩として、又上司として公私共種々御指導を受けてきた。

井上さん御夫婦には御子様が無く、永年二人限りの睦ましい生活でした。趣味として、時にはお二人で長唄や小唄を楽しまれていた。外出も二人連れが常であった。

本年初め項、奥様が結石で入院手術を受ける事になり、この為井上さんは、独りとなるので前記老人ホームに入室されたのである。

入室時は平常通り健康で自ら歩いて入られた程であった。然し独りとなった淋しさの為か奥様の病気が心配で急に食欲が減退し体力衰へ死亡されたのであった。

奥様の病気のショックが如何に甚大であったかが解る。平常二人限りの暮しであったので尚更である。

其後奥様は手術結果良好で無事退院されました。心安らかにお寝り下さい。